

妙見祭で見た景色

熊本県立八代清流高等学校 1年 廣瀬 文哉

私は、八代の「妙見祭」の亀蛇「ガメ」に入り、演舞をしたことがあります。妙見祭は九州三大祭りの一つであり、ユネスコ無形文化遺産にも登録されています。町の人口が減少する中、妙見祭は、地域みんなで助けあって継承している伝統文化です。

私が初めて参加したのは小学四年生の時で、子ガメとして参加しました。早朝から、地域の方々が熱心に準備されていました。子ガメは当時の自分にはとても重く、また当日はとても寒かったのもよく覚えています。妙見祭は長いパレードみたいなもので、約六kmの道のりを歩きます。そしてその途中で演舞を行います。演舞は子ガメの中に五人入って担ぎます。長時間持つと肩が痛くなりしんどいので、次々と、人を交代させながら歩いていきます。

朝は午前四時に集合するので、早起きと食事が満足にとれず、当時の私にとってはかなりつらかったです。しかし、ねり歩いている途中で、地元の方々が皆さんも大変な中、自分たちを気づかい、食事を用意してくださって本当にありがたく感じました。

演舞は様々な場所で行います。八代駅や商店街など、だいたい三十回程行います。単なる移動でもあの重いガメを担いでいくのは大変です。特に河川敷での演舞は、足場が不安定で難しく、怖さすら感じました。しかし、そんな時、地元の方々の励ましがあり、不思議と力がわいてきて、いつの間にか楽しくなってきました。私は、人の温かい励ましや応援の力は心を前向きに動かせるものなのだと実感しました。

妙見祭は、人々のつながりで作られていると感じます。あの日参加した時に地元の方々が一つになって祭りを盛り上げていたのが印象的でした。自分にとっても地域の方々とつながりを感じ、故郷の伝統文化に関わる良い機会になりました。そして、地域の方々が妙見祭を大切な存在として継承しようとしている、その熱い思いを感じることができました。

妙見祭はユネスコ無形文化遺産や、九州三大祭に登録されているから、大切に引き継がれてきたのではなく、この祭りは「みんな」の想いでつながってきたものだと思います。地域のみんなも、神輿を担いでいる人も、亀蛇を演じている人たちや、妙見祭を見にくる人たちがいるからこそ、妙見祭は成り立っていると思います。過去から今までずっと続いてきている伝統文化を大切にすることで、自分たちを育てた歴史や精神を未来へ受け継いでいきたいという気持ちが共有されて実現しているのではないかと思います。

今年もまた妙見祭の季節になります。故郷を襲う災害からの「心の復興」のためにも、地域の人たちとともに、高校生になった私は伝統のバトンをつないでいきたいと思います。この妙見祭の魅力が、百年、二百年と受け継がれていくことを願っています。